

ゆうべの星の またたき



2021.6

23期 KIMI ORR
(旧姓 金村 紀美子／アメリカ在住)



文集届く

高校を卒業して早や60年近くになろうとしている。そして今、初めて北辰文集を手にした。日本から4か月もかかって、やっととどいた文集。

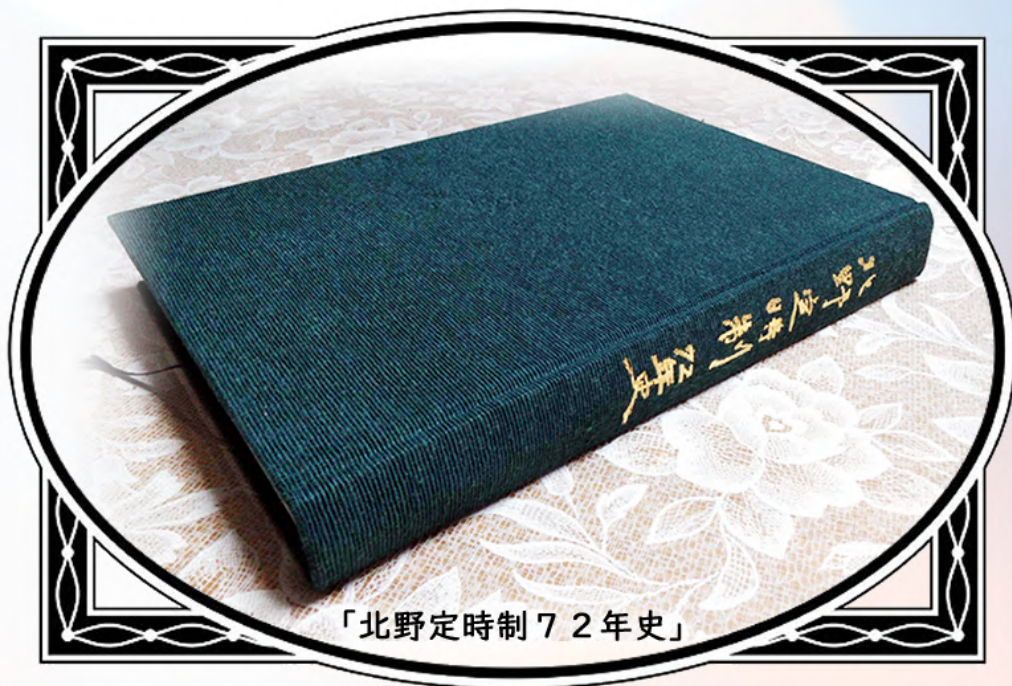
あれは昨年（2020年）の12月30日でした。長旅で疲れ切ったようなパッケージが、迷うことなくサウスキャロライナの私の自宅に届けられた。其の一週間前ぐらい前に前田事務局長から「今、本はどこにあるのでしょうか？」とE-mailが入りました。アメリカの郵便局ではずいぶん前に海外への船便は廃止されている。それでどのようなルートでこちらに届けられるのか定かではなかった。

箱にはたくさんの本が詰まっていたので、先ずもって驚きました。ひょっとして北辰会で編集された本を全部送っていただいたのでは！と思いました。



そして思いもよらぬ「スターバックス」のコーヒーの箱を見たときは思わず笑みが浮かびました。「スターバックス」の本場はアメリカじゃなかったかしら！咄嗟にそんなことがよぎりました。なぜかこの交差が面白く思われた。前田事務局長のお心使いでした。有難うございます。アメリカ製でもなぜか日本から届いた「スターバックス」の味は“格別”でした。その格別な味のコーヒーをいただきながら、時間のある限り読みふけりました。





「北野定時制72年史」

最後に手にしたのが北野高校発行の「北野定時制72年史」でした。辞書のように部厚くて、『これは時間のある時にでも読むことにして』と思いながらパラパラめくっているうちに目が釘付けになり、何日間かかかって読み終えた。ただ圧倒されました。すべてが私にとって真新しいことばかりでした。4年間北野に通っていて何を見ていたんだろうと思わずにはいられなかった。文集を読みながら、どなたが編集されたのだろうと思いを馳せたものでした。その方の名前を知っても、その方がどなたか知る由もないのに、何故か知りたいという思いがこみ上げて来たのでした。

校長先生を含め、諸先生方の生徒たちとの“校友関係”、『教員は父親代わりだった』（北野定時制四十年史）と言われている。クラブ活動を通しての部員たちの人間模様、そしてすばらしい同窓会集会などすべて私の想像を超えるものでありました。

KIMI ORR さんのご自宅 / サウスキャロライナ州チャールストン

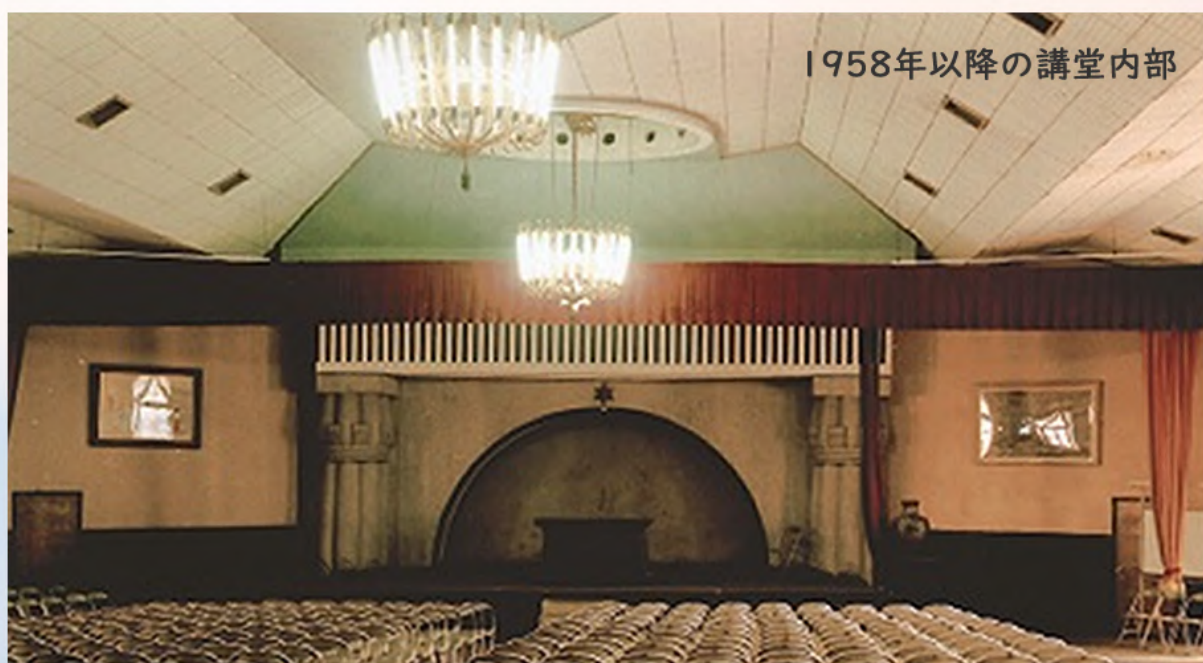


誇らしい我が先輩たち

まさに人間は『環境の産物』のごとく、時代が変わればその変化に応じて、生徒たちの学ぼうとする意欲も変化していくようです。人間は苦勞して成長するのでしょうか！戦争中で物質不足で何かと厳しい生活状況の中で、又いつ徴兵制度（徴兵延期認定も理工学部 of 生徒たちにだけは許可が与えられた。このような不公平で不合理な制度をただ黙認していたのだろうか！なんて思いながら）に囚われるかわからない状態でありながらも『自分たちは昼の生徒には負けない。彼らを打ち負かすんだ！』とのガッツは自信満々！このような先輩を誇らしく思いました。

あの頃の入学時の競争率は高く、それを突破して北野の夜間生になったことに誇りをもち、勉学にいそしんだ先輩たち。停電の後、ろうそくの乏しい火をともしながらの授業はまるで物語を見るようでした。そのような苦学をしながら多くの夜学生が一流の大学や国公立に入学されている。

『彼らは言葉だけでなく』、自分たちが『本質本者』であることを立証した。



勤労学生は時間や経済的に追われながらも、学びの意欲だけは人一倍である。いろいろな事情により学校生活を続けられない人はいる。しかし学びたいと思っている人はまた戻ってくる。そのような人は精魂込めて人一倍頑張る。どんなに苦勞し自分に落胆した人たちも、自分で解決し立ち直る。この何事にも動じない精神を育て、一步一步自分の人生を開拓していく。これこそ北辰魂というのでしょうか。『学問は繁栄のドアである』といわれるごとく、北野定時制課程の多くの卒業生が国や社会の指導的立場に立ち、貢献し、活躍なさっておられることに大変圧倒されました。特に地方出身の人たちが仕事と夜の学びに挟まれ大変な苦難、苦学を経験されたことも、この文集を拝読して知りました。職を変わればもちろん寮も追い出され、住居も探さねばならぬ。それもアルバイトのような仕事であれば尚更大変。其れも学びたい一心で、新聞配達や牛乳配達をしながら、また夜ラーメン屋をしながら、一流大学や医学部を目指して頑張られた方たち。そのような苦難を乗り越えて多くの人たちが成功されている。信じがたいことです！

このような苦勞の中で彼らが全うできたのは、先生方の熱意や生徒たちへの深い愛情のある交友関係であったという。北野定時制は先生方と生徒が一丸となって『誇りある北野高校』を作り上げられた。この先生と生徒の『交友関係』はどこの学校にも勝るわれらの誇りであると思います。

旧本館東端の
楠の大樹



旧校舎北門(通用門)から
図書館への道



私の高校時代

最高に楽しい時期でした。今から思うと本当にたわいないことのようにですが、友達やクラスメートと一緒に大阪近郊の山などよく行ったものです。その時の今でも忘れられない苦い思い出がある。クラスメートの何人（10人ぐらいはいただろうか）かと嵐山に行った。その帰りいつものようにみんな『キセル』をした。駅には電車はすでに私たちを待っているかのように止まっていた。ワイワイガヤガヤ言いながら、みんな一番後ろの車両に乗った。ガラガラであった。“コンダクター”が異様な目で私達を見ていたのを見逃さなかった。ヒヤッとした！彼は知っている！何となく落ち着かなかった。案の定、電車が発車してすぐチケットのチェックに来た。我々皆次の駅で降ろされた。「学校はどこや？」、「北野です」、誰も『定時制』とは言わなかった。家路につくまで何かすっきりしなかった。



あの頃遠足なども行った覚えはないし、先生方との交流はあまり記憶にない。私自身何に対してもガッツとか、野心はあまりなかったようです。また大変自尊心の低い子でした。でもいつも『大学』に行くことを『ひそかに』念頭に置いていました。別に何になりたいというのではなく、自分に自信を持ちたかった。人の前で堂々と自分の意見を言えるような人になりたかった。これからは『英語の世界に入る』なんて勝手に思い込み、夜遅く帰宅すれば『疲れて勉強する時間がない』と不満を言いながらも毎日英語の予習復習は欠かさなかった。

ところが4年生になって英語の先生が変わって成績が『がくっ』と落ちた。その時は一瞬落胆した。

そしてついに卒業するまで成績は挽回できなかった。こんなことで大学に行けるやろか。こんな不安な気持ちを打ち消そうと必死だった。またそんなとき『幾何』も落ちた！落胆しているところに新たな落胆に圧縮されて息が詰まりそうだった。卒業した年は経済的な面で受験できなかった。私の職場は梅田であった。卒業後、もう一年そこで務めることにした。そこから程遠くないところに中之島図書館があった。勤務後夕方5時になると、毎日まっすぐその図書館に通って勉強した。大学受験は家族には内緒であった。父はいつも「女は大学行ったら、理屈っぽくなって結婚できない」といっていた。家に帰れば10時、帰りが遅いといって毎日母に怒られた。あの当時から中之島の図書館は人がいっぱいだった。寒い冬、2時間ほど待たされるときもあった。やっと中に入れたら、『ふあっと』生暖かい空気が体を心地よく包み込み、いつの間に眠ってしまったのか、目が覚めたらもう帰る時間だった。またむなしい気持ちが私を不安に追い込む。予備校も行きたいと思った。でも予備校に行ったら大学に行くお金が無くなる理由で行けなかった。『頭があったら』国立でも受験出来たのに。『頭がないから』私立やったら三科目の受験だから何とか行けると考えていた。

ある私立の大学を目指していた。そこは授業料が安かったから。試しの試験を受けてみたら『やばいような気がした』これで滑ったらもう大学は行かれへんのや。あの時受験料が5千円だった。受験料の予算は5千円しかなかった。どこの学校に行くか選択の余地などなかった。『絶対合格』が必須であった。それで『やばいギャンブル』はやめて

『安全パイ』で行くことにした。私は無事『大学生』になった。もちろんこれも北野高校を卒業出来たおかげである。この二つの結果が、後程私の人生に何かと大きく貢献してくれたのである。



中之島図書館

皆様の投稿を拝読させていただきました。私には多大に学ぶべきところがありました。昼と夜の北野は『雲泥の差』があるといつも自分のレベルで測っていました。でも『雲泥の差』は私だけのようでした。先輩、同窓生、そして後輩たちが社会の一線に立ち活躍なさっておられることは、私のことのように誇りに思い嬉しく思いました。夜の北野もやはり『名門の北野』であるんだと、今しっかりと噛みしめています。このように顕著な学校に我々を導いて下さった校長先生、先生方、先輩の皆様方に心から感謝の意を表します。特に私の担任だった前田先生、南部先生、そして中野先生（先生の奥様“すてき”です！）多分私のことなど覚えておられないと思いますが、あの頃は何かとお世話になりました。すべて走馬灯のように私の思いが駆け巡ります。今、想いは60年前に戻りました！そして北野の校舎にいます。授業に遅れないように薄暗い石の階段を上がりはじめました。どこからか校歌が聞こえてきます。その快いメロディーに合わせて口ずさみながら。ゆっくりと階段を。（何か胸がいっぱいです）

ゆうべの星の またたきを
理想の影と仰ぎつつ
人は家路に 向うとき
いさみて集う 文の窓

校 歌 ▶

上のボタンをクリックして「校歌」をお聴きください。
（開いたページの「校歌」の文字の下
の青字「校歌合唱を聴く」をクリックすると聴くことができます）。

私が通っていたころの高校時代を思い出すとき、何故かいつも石の階段を上ろうとしている場面なのです。あの歴史ある建物で学んだことは私の永遠の思い出です。いつの間にか背伸びをすれば手が天国に届きそうな年になりました！

諸先生方また北辰会の方々どうかご自愛くださいませ！

(完)



事務局より

Kimi さんには、多くの文章とご支援を寄せて頂きました。今回の文章は、私達と共通の想いが詰まり、身近さを一層感じました。さあKimi さんはどう青春を過ごされたのでしょうか。ワクワクする気持ちをおさえられません。

